

論文内容要旨

論文題名 成人発症微小変化型ネフローゼ症候群の検討：発症時年齢と長期予後の関連

掲載雑誌名 昭和学会雑誌 第75巻 第1号 2015年

専攻名 医学研究科内科系内科学（腎臓内科学分野）専攻（藤が丘病院）
氏名 小向 大輔

内容要旨（両端揃え）1200字以内 MS 明朝 13P

成人発症微小変化型ネフローゼ症候群（Adult-onset Minimal Change Nephrotic Syndrome: Adult MCNS）のステロイド反応性や長期予後についての報告は少ない。本研究では Adult MCNS において年齢と治療経過や治療関連有害事象との関連を明らかにする事を目的として以下の解析をおこなった。当施設において 2000 年 12 月から 2014 年 2 月までに腎生検で診断した Adult MCNS 68 例を対象として年齢の中央値 41 歳で若年群と高齢群の 2 群に分け、患者背景因子、再発様式、ステロイド関連有害事象および prednisolone 累積投与量の群間比較をおこなった。また Kaplan-Meier 法を用いて累積寛解率、累積再発率の群間比較を行った。加えて寛解導入期間（治療開始から完全寛解までの期間）および寛解維持期間（完全寛解から初回再発までの期間）と、年齢をはじめとする発症時の患者背景因子との関連について COX 比例ハザードモデルを用いて単変量および多変量解析を施行した。

全体の検討では、平均年齢 43.6 歳で男性の割合が多く、高血圧は 23.5%、血尿は 11.8%、アレルギー歴は 23.5%に認めた。血清クレアチニン値、血清アルブミン値、一日尿タンパク排泄量の平均はそれぞれ 1.15mg/dl、1.89g/dl、7.92g/日であり先行研究の背景因子と同程度であった。若年群と高齢群の 2 群間で背景因子を比較したところ、年齢以外のパラメーターに統計学的有意差は認めなかった。全例でステロイド薬による治療が行わ

れ 33 例(48.5%)にステロイドパルス療法が施行された。Cyclosporin と prednisolone の併用を行った症例を 4 例に認めた。群別の治療内容に統計学的な差異はなかった。治療後 1 年以内に全例の寛解導入が可能であった。両群間の累積寛解率の差をログランク検定で解析したところ、有意差を持って高齢群において寛解導入が遅延していた。累積再発率は両群間で有意差を認めなかった。寛解導入期間を予測する因子を検討するために COX 比例ハザードモデルを用いた解析を行ったところ単変量、多変量いずれの解析においても年齢増加、eGFR 低下が寛解導入を遅延させる因子として関連していた。再発様式、累積 prednisolone 投与量は両群間に差を認めなかったが経過観察期間中の細菌感染症の頻度は高齢群で有意に増加していた。

MCNS はステロイド薬への感受性が高く、本研究においても 68 例全例で少なくとも一度は完全寛解に到達する。しかし 63.2%で再発がみられ、累積 prednisolone 投与量は経過観察 3 年目においても更に増加傾向を認めており、高齢群においても若年群と同様に増加する傾向が見られた。特に高齢者においては感染症をはじめとする有害事象に注意する必要がある、初期治療の段階から積極的な免疫抑制剤の併用によりステロイド薬の累積投与量を抑えるなど新たな治療レジメン開発の必要があると考えられた。